浴

朝

ブル

立山山頂より後立山をへて東方雲海を望む

- 外村陽二君作品-

灰

登

ディモ



洛星新聞編纂部 京都市北区小松駅南町 TELの2334

の記録、旅の話など、夕凉みでも しながら楽しんでもらいたいと思 家かい読物を集めてみました。山 い記録はやめにして

綠蔭特集号

だから夏が暑いのは仕方あるまい

つう、暑い準備を互と名付けたの

暑い、湿い、なぜ夏は得いのだ

て茶をたてて原しい顔をしているいいいといつている。

に目受けて生きた人であつた。そ

書の中に人麻呂、

西行、芭蕉に関

一釣の上には袖煙で真黒くなつた木

からは大きい鉄瓶が掛けてあつた いけてあつて、太い活宗竹の自在

彫の側がとりつけてあつた。そこ

の椅子に腰を下ろして熱い密菜の

御馳走になつた時、こと数日来三

保護調から給ケ匠へかけて総走の

と幸隠じていた。今はもら不必要 そ出さないが、極度の空腹と疲労 山旅を試みて来た私たちは口にと 狭い部屋の火の前にすわつて、

しかしいいといっていても

見た目を涼しくして精神を緊張さ 決して旅しい筈はないのであるが

パートなど暑さを忘れさせてくれ 冷房装置が出来てきて映画館やデ 近頃では凉しくする方法として

には「心自鍼却すれば火もまた原

てお言この冷房製資をしてくれる

せて暑さを忘れるのである。禅宗
て有雌い。我々の学校にも何はさ

います

洛星新聞編集部 かろう。しかし 帯への部場もよ ろうし、高鼠地 お金があれば北部道へ旅行もよかし」という言葉があるそうだ。心なら先生も生徒も間率が上り夏休 収々は暑いちまたにあつて戻しく しのぐ方法を工夫せねばならぬ。 どちにもならぬ。なんとか写さを

な花をいけ、そこで、きちんと着そべつて氷でもしやぶつているのの楽しみも味わわしてもらえるわ 物を消で足侵まではいて、シュン には雪景の軸でもかけ、原しそう 茶人は庭にたつぶり打水して床 のである。

型すことを考えればならぬ。

の持方次第で、真夏にドテラを着 るのであるが ……。しかし会計

3

思

3

格率、百パーセン ト願いなしと信ず

みも不要、大学合

てこたつにあたつていても涼しいが冷房装置など思いもよらぬこと

シエン馬のたぎる銃の前にすわつ とんな人間にかぎつて何時までも が、これが一番涼しい筈なのだが

常識的には崇継で音鳥の上にね。有難い夏休みもあり、海へ、山へ けた。 といつてくれるおかげで我々には

た。中仙道である。幾世紀もの再

い間、とのような夏の夕暮には特

私たちは礼を述べて道路に立つ やがてゆつくり休ませてあらつた であつた。

くして鉄瓶の湯を注ぐという有線 にして、今度は勝手に瑪茶を新し かじりながら暫時にして薬臓を呼 となった非常食用のラスクなどを

ある。征歴の街道の有様も合は道 に賑つたであろう古い宿場の跡で

滕村のふるさと

木曾の馬籠を訪ね

寬

心につながる

血につながる

恩思がありますから素晴らしいス を入つて正面にある白星の上場に はめとまれた一尺四方ほどない板 これは愚暗藤村が生れた木曽の馬 防れたのは七月も宋の一日、短い 他の本原跡に新しく建てられた「 の自筆であつた。私たちがことを と刻まれている交句である。旅村 言葉につながるふるさと ふるさと ふるさと |午後の日ざしも調く於ろうとする|かれた。順の部分の他はずつと中 てには脳に立つ梅の若木がその鞘 に続失してしまつて今は三百坪は 本随屋敷がそとに残つている訳で かな雰囲気を感じさせてくれた。 はない。明治二十八年とかの大火 じて十七代も続いたという宏壮な とは言つても江戸時代三百年を通 も際村の生家に来たというもの彼 つ三つ転がつているのが、いかに の影光語としていたし、やや湿り 頃であつた。そしてその白牌の面 を特びた上の上には背標の実が二

り、また自分の弱さと小ささたよ 山者になることをすすめます。そ は若山をすることが大好きでした 他の登山者の心をもつと深く知 大自然と、自分たちの国の有様と し現在のローマ数學ピオ十二世も した。ベルギーのレオポルド国王 ポーツです。これまでにもたくさ お若い時にはよく登山されました んの有名な人たちは登山をやりま みなさんも学生時代から良い登 の結晶の様にも思われた。さつき すぐ側から奥行一間半に間口十間 夏望に避われた小さい池があり、 の十場から右に折れるとそこには れだけに
又、
藤村が常に心に
温め すような大きいものでもない。そ 派なものではない。人の目を驚か を選んで郷土の先輩の為に捧げた がつた馬節の村人たちが、小学生 ある記念館は昭和二十二年の秋に あるに過ぎないのだが。そして今 つかが往時のそれを偲ぶよすがで かりの一段高い空地だ、敷石の機 真実、藤村の「皿」につながり、 ていた「簡素」なるものの美し含 「心」につながり「言葉」につな 「記念館」なのである。決して立

|に至るまで、或いは柱を削り、土 | 過ぎないものだつたがその初々し

た。そんなところで幼なかつた日 の腹村の面影を描いていた私はや て来たのである。室内の壁面には つたその流は金身で何事かを思索 固く結んでやや語め前かがみにな しく豚か何か着なれた知服に得る を見出した。除年のものであるら や興まつた所に彼のプロンズの像 さがひどく私をとらえたものだつ が耳赤い林檎を一つ渡しているに 黄色の荒い縦縞の着物の花子さん りに草灰ばきの太郎さんに、赤と す。何の変哲もない人形で組がす 人形にしたの差弱たことを思い出 前にどこかのお宅でこの詩を木彫 古をあげて読んでもみた。私は以 る勝村詩「初添」などはみんなで 足を留めたり、佐藤春夫の様にな た。次男鶏二氏の描いた肖像画に 藤村を記念する品々が掲げてあつ される全ての過去を背負って生れ えば勝村もとの懲紋によつて象徴 す西日に郊かんで嵌しかつた。思 一つずつ描いてあるのが白紙を通 木瓜(モコウ)のしるしが朱色で って、その一枚毎に島崎家の定紋 の広い腰高の明り障子が立ててあ 臨行

の晩年ヨーロッパの旅に出てギリ は「谷」であつたのを直したのだ る。……ある所は数十間の深さに けられたというのである。屋根に一れて遊ぶ子供たちは藤村の血につ 度であつた。そしてそれは常に安 考える」というのは常に臆村の態 そめて考えればならぬ」とも書い 後に「……とのことは心に深くひ ねむの花の紫はあれ以上濃くても られた機骸があるのに違いない。 二つの語の相違に実は文芸の秘め とわかる。どちらでもよいようなしようである。 てあつた。 に船魚で簡条書きにしたものの最 至日本のそれと比較しつつノート シャの風土と人情に西洋精神の古 淡くてもいけないのである。又そ一屋敷跡のする。西際に家を立てて長 ある「木曽路はすべて山の中であ る。臓村もそれをやつている。例 耐えんが為である。ひとり馬強に は杉皮を材木で抑えて丸い大きな 火災にも頻焼をまぬかれていた。 旧本陣跡の東北隅を形成している して像の側の明り障子の出窓には えば「夜明け前」の冒頭の一節に して今おいた色が気に入らないな 配々と帰じとられた。画家は時と た。画家がカンバスの上におく絵 石がのせられていた。全て風智に から論語の家読を受け手習いを授 その問居所の二階で少年藤村は父 隠居所と土蔵一棟とは幸い数度の 便の数輪とがひそやかに活けられ 古銅の流に利の長い黄色な野草の一ではなかろう。そんな事を思えば い源を見出そうとした彼が東洋乃一 らばそれをナイフで削ることがあ の具を選ぶのと全く同じ周到さが ととろ」が「言葉」に巡み後つて 説の構想や本文の原稿に、彼の「 数された内部の照明設倒によって 花と微含紫もしずるるばかりな桔一 結品してゆく姿をみることができ 彼の作家としての生涯を辿ること 様な屋根の下で人が住むのである 限つたことではないが、奥美濃か ができた。初期の詩集に、長篇小 国に陳列されていた。私たちは改 廻り品など四十会点が階上階下四 土蔵には藤村の蔵書、原稿、身の 一般へかけての木管路ではこの ……」の「深さ」はもと 系譜もどうやら明らかなようであ 日本芸術の伝統の中に彼が占める り、その前には盆の霊送りに手向 の花が溢れるばかり挙げられてあ で四寸角、高 ものがあつたろう。山門を出て十 夜明け前」に記すのはこの堂であ うその頃はかなり日も傾いて古木 ながる後輩である。やがて石階を ていた。屋敷 けられたものか難と麻がらの燃え だけである。 節をとつたかは報するだに余ある たる思いで藤村が「夜明け前」の 人にその体をだきとめられたと の抗し難言に棹さしつつ遂に狂気 そら長く立つ ていた。しかし私たちがその前に に囲まれたその辺りは薄暗くなつ 登つて大きい本堂の前に出た。も 訪ねることに 十蔵を許した私たちはかなり使れ するものが多く目につくのも偶然 残りが散らばつていた。折からし 見出した。子供たちのものと近ん 数歩、私たちはそこに勝村の嘉老 鏡の父であることを思えば、如何 る。その学感のモデルが籐村の肉 それ故ばかりではない。世の荒波 しながら村落の北にある永昌寺を ばせる岩壁な る。彼らは苦悩する人であつた。 「島崎春樹之墓」とある。唯それ に貼った半蔵が扉に放火して、村 に耐えなかつたのは した。細い路地に辨 のとの土地に孫を遊 と時候の言葉を交

そんなことを思いつつ私たちは木 つた。藤村の生涯は離れがたくと 一男旗雄氏を帰農させ、やがて自ら ば両額の優から出られないのと同 人間とに反抗を感じつつる、例え一中に一すじ白く残る爪先上りの街 し私たちは常にふるさとの自然と たのだ。「心につたがるふるさと の末曽山中の寒村につながれていーくませて並べて向うの土堀の道へ も祖先と同じ墓の土となる人であ ばらくと絶えていた鯛の声が降る た。そとには 神前の休息所 じように、ふるさとの土とつなが いたのだ。現に合もあるように旧 た。常に察じつづけ偲びつづけて はしかし村を捨てたのではなかつ つているのでもあろうか。 にもどつたのであつ 幼くて村を出た顔村 一間の囲作長に少し

ひと時をそれぞれの心の奥に焼き

しかし竹間には辺奈 で約三尺の石柱に、 を、恐らくは再び訪ねるとともな 私たちはバスを待つ間のしばらく 消えて行つた。あたりには急に黄 わしくなる。その騒ぎも一しきり いであろう木首の馬籠の夕暮れの 道、屋根に石を置いた両側の二階 いの静寂が記し寄せて来た。その おさまると仔馬にも田川の水をふ 屋、寺の森、そして端の声……。 仔馬は何に驚くかして感んにはね 親子の馬をひいて帰る人がいる。 生資をのぞいたり、花腹の美事な 大きい健を数匹かこつた家の前の 前」の言葉は今なお生きていた。 てゆく夕べの拶抄にも「夜明け つてゆく。それらの人たちの交し ものに思われる私たちである。そ た。そとを立去ろうとした時、行 の石畳にそれを偲ぶのみである。 廻る。村の四つ辻の広場は一時限 に出た私たちはやがて中津川 鳳仙花を眺めたりして村のはずれ 総さんが不意に表われて仮道を登 のうしろからは草刈籠を背負った ない明け暮れのできごとが珍しい の人にしてみればなんの不思議も 暮の門前を趙つてゆく。との土地 と人に会つた。荷をつけた馬が夕 く手のだらだら坂を登つてくる明 本陣の 大きい扉 も既に 閉じられ へ出る最終のパスを待つていた。

(1)

6 1 No.

つて少しは遊らかも知れませんが て考究でみますと それは人によ にはないでしょうか。 人体二つに分けることができるの

ありません。 次5.....。

も多くの周辺を与えます。 第三に登山は狷神的な面に於て しかしそればかりでは

なります。会局をよく運動させて だと考えている人が世の中には多 いは翌日の目的をあまり理解しな について全然何も知らないか、或 と思います。そんな人々は登山 第一に登山をすれば体が丈夫に 人です。まず登山の目的につい 鉱物楽勉強します。その上登山に ばかりいないで高山の動物や植物 天候の予如、クライミングの技術 例えば野常の方法、方角の発見、 際しては色々な知識が必要です。 地図の読み方、教急手当の常識、

す。これは町の中では全く与えら

すとし変つた人造だけがするもの な顔をしています。

登山なんかするのは無駄な事でとりますから登山者はいつも元気。自然の偉大さの前に人々は自分の ちます。真面目な登山客は遊んで 御恵みの深さを少しずつ知るとと 第二に登山は知的な訓練に役立 天王様の御創造の霊妙さ、甘美さ 改めようとする弱気が高いて来ま とができます。登山者は危険に陥 ができます。その上、登山の保難 つた場合、自分のとれまでの生活 切に姿際して良い友遺をつくると 人に対しても登山者はお互いに紹 に会う時、登山者は自分の窓間と 勇気を鍛えることができます。他 小さい事と弱い事とを理解して、 について反省してその後の生活を

ンティニ神父 ゆつくりと登つていました。この 術と設備本必要とします。勿論、 その例です。その為には特殊次技りよく理解することができるでし ブは特別な難しい道を選んで山に りができます。しかし或るグルー 点差注意したら能でも普通の山登 うすれば天王様によつて作られた 登山の大切な規則です。それらの **特別の登山よりも雕しくて危険で** ようにゆつくり登るということは 登ります。学校の登山部なんかが お流さんやお婆さんを見て驚きま 私が富士山に登つた時には多くの したが、それらの老人は落着いて あれば誰にでもできるものです。 れることのない良い機会です。 また登山は或る程度健康で含え

すが、もつと面白くて有益です。 それは勇気とチームワークの精神 炎もつと向上させるからです。 心山にはこんなにもたくさんの れだけでも充分だと思います。

必要なことです。登山の際原はそ というととは人間にとって大変に 自分の本当の姿と価値とを知る

ばかりの概長で副市風な建物に導

| ばない程な多くの深い悩みを一身 | にも似た彼の生命がある。彼の蔵 | 鯉をたてながら微かばかりの火が | つけたことであつた。 するようであつた。藤村は非凡なる。しかも苦悩の道を自ら副寛し

人であつたが放に、常人の思い及

ようとするととろに一人の究道者 郷な道ではなくて

湾悩の

道であ

江戸域のお堀の石垣に東草が深く お城を作ったもんだと、今さらな

左手の方になる。ずいぶん大きな

国語研究所にて

画館鳥の

世話に大童わ える。皇居はさらにその中ずつと

川のような塩水に青黒くりつつて おおいかぶさつて、よどんだどぶ

かましい道路で、その行こうにと

を流しながら七月末に出動するな

今度作られた京都市交響楽団のコ 思つたが、考えて見れば、毎日汗ヴァイオリンの山田崇二郎先生は

んてことは、生れてはじめてのこンサート・マスターに就任され、

ますます元気に仕事を続けておら

れる。近く洋行されるという時で

にやら汗が止つていた。白馬院小 う。河頂は凄く屈しい。何時の間

リーダスダイジエストのしや

げたいと思つている。

健康と努力を折りつつ

ある。

とであつた。汗に何する成果をあ

のどかな輪をはいて語つて行く。

暑い所だったかな」といふかしく

選ぶらしい荷物中が、ボンポンと七月すえごろ「東京つてこんなに

て、回順にふけるどころでにない

体の調子は上々で、大いに制作に

は例年の様な病気にもかからず、 わらわというところ。今年の夏

る。ポーターの宮田順平さん(白

お花畑があり、雪陰がある。岩鏡

な仰天した。避難小屋の人の話で つてやれやれと思った瞬間、みん

ざると森林地帯に入る。居食をと どんどん降りて行く。お花畑を過

岳を通つた時、祖母谷へ9キロと は半分も来ていない。たしか消水

書いてあつた。ところが1が抜け

能力学定を取り止め

ある。槍ケ岳の尖端が遥か彼方に

が連なつていた。本当に山又山で

々。真正面には北アルプスの全容

クツションにして感り、雨を見る お花畑で高台である。高山植物を 続ける。素晴らしい展留台へ出た

と右に間近く立山、剣、黒部の山

は動物図長さながら鳥の世話に大

専心するとはり合つておられる。

0

0

がら思うけれども、夏の日ざしは 盛度なくプラインダーをやきつけ

夏

よ

9

聞

岳から黒部

記

山田、矢谷(以上高一) 正木、前田、小川各先生

中村、白昌、大川、杉本、岩佐、

柊、 辻

容加者 期

日

7月26日-8月3日

的にとりかかつた。アイセ

は誰一人も欠ける事なくプラット の間にか女性軍に席を取られたり 波。もぐり込んだり倒り込んだり かしこれが大変。雖然とした人の 置下車、中央線に乗りかえる。し が真赤に別いていた。名古屋で全一後立山は雲に磨れそれに続く白 温い琵琶湖の彼方比良山には落日 | えるその中央にくつぎりと雷災。 | じている。ふと版外炎望むと春色」られた。杓子岳が正面に堂々と見 屋へと直進する。見刻すと三三五一つて来た四ツ谷。白馬高校へ行つ ホームを潜り出した。列車は名古 総勢十二人の参加者を乗せた列車 する。やがて列車は松本に着いた 強く汽車に辿り着く。汽車の中で 事持ち無沙汰で山の 語や談笑に 戻 は密席の領奪戦が行われる。何時 京都 簡見知りの仲間がいる。みんな一て旅の終れを休めた。教室の 松本 第1日 7月26日 雪をかぶつた連峰は肝風の様に突しくつと迫る様な岩峰がある。下を が青々と緊茂する夏草や木々の間 めても知言ない連曲の恋である。 馬連山も雲で稜線を現わさない。 からは日馬連峰の岩層や監察が見 に会つた。山割れのした体つきの 正木先生の窮友である大久保先生 目につく。仁科三洲を通過してや られる、時おりきらきら聞く水面 の山が映り池の周囲には粘戸が見 侔丈夫であつた。 に見られる。随所に白樺の白さが 超してつてつとしている。幾度眺

つつたらしい。やつとの事で大言

浴を乗り越えた。向らには約

四ツ谷→ 白馬山 頂 第3日 7月28日

松本→四ツ谷2月27日

馬高校8・30

旅行から八月十二日景都へ帰られ た。この旅行で側伯は二十四種と 内は明かるい。左手はとみると木一の川の青、岸の岩の荒々しい原茶 り移つた一行の顔には調く不眠の一が起つた。バスを下りて白馬田老 東の空が白みそめた団大町行に栗一林地帯に分け入つた頃パンク事件 かの鳥をとつて帰られ、現在画伯 また所機関伯は五月末から今月の た。何時の間にか太陽が昇り、車 目である。しかし朝の空気は清々一 が見えないかとしきりに見るが駄 上旬にかけての福島県下への制作 物の大きいのが加わしい。発車し しかつた。大町で又乗りかえ。荷 松 5·30-20 Y 60·20-10 い調つた目をしている。山 バスを下りていよいよ歩き始める 所に告がたまつて皆然となる。大 やつと冒煙け水の上を越えた。そ 茶色に見えるから迷くから見ると 眺めた。岩膚がごつごつとして白 荷物は芸た大きい。前出先生の 四ツ谷からのバスが畠中を走り添 先生のもでかい。汗がほたほたと などはポーター並みである。正木 色。その向うの緑樹、上にぐつと 智楽の白が魅惑的である。バスは る。 左に目を転じると山頂小屋と 響と見間違う。その山南のさけた **聳える山の日。山腹を流れる雲。** 起床5-出発6

てゆく。何くそとは思うが中々つ 歩くだけである。樹林の道を通り らい。凝倉小屋を出てからはただ **陽高校生)は平気ですたすた歩い** である。 白馬大池往

あつた。ちよとんとあどけない部 める。「おや」と思つた。質鳥で まい。朝の空気を吸つて頂上を眺 快晴である。新鮮な山の空気はう 起床6一出祭り・45一山頂10・ 15-大池12・5-テント4・25

いさんが「罰済からの水だ」と言

つて歩く。冷風が吹いてくる。順

山を右に巻いて上下し、谷川を波

齢消である。朝の青い水面には緑 われるかも知れないが、歩調のあ ら返りを起したのだ。情ないと思 らは風に伴奏する如く岩の落ちる わないのと荷の大きい所から足が 足の故障である。多くの者がこぶ ろう。所が困つた事が超つてきた だなあと思う。京都ではさぞ呈か をつけリユツクを背おつて歩き 音がする。白日ただ真白である。 立てて掛いてゆく。 夏にふるえながら雪を見るつて変 しも真面目に扱いている。時行 があるのと流れる。左右の とでも由来かけたくなつた。 した。サングラスをかける者も現

> 膜である。 酸がある。

でくる。獣々と前の地面をみつめ 務ちる。リユックは同へくい込ん 岩が突兀と伸びている。杓子岳と スの山間は目にしみて快かつた。 けた。更に緑の山を迫うとアルブ ずつと左へ挙廻版して旭岳を見つ **見れば見る程像大に見える。なお** の遊は淡々としたものであった。 く嫌器色に見えるのが鍵ケ岳であ 見たのは前方の岩だつた。もう一 松の原が青く青く見える。ほんの 白に黄が多い様だ。知つているの 夕食を消まして早々にテントへ入 山頂である。頂上の向うは見えな 正真正銘の杓子岳である。更に選一の山々が果てしなく続いている。 つ後ろに聚然としている岩山こそ りと白い草花が見える。際起した つくと日馬小屋であつた。花畑の がやつてくる。近側した道を辿り 紫くらいのものである時折り無限 つた。水は前の雪淫の水を使らの かくて小屋の附近にテントを殴り い。いや空に続くのである。頂上 は機然草の白と、お山えんどうの 一帆に荷を下ろし速縮した。は にした。大池はロマンティックな ので後立山 あ」と暖声をもらす。荷物が非常 見える。我がパーティーの足は索 関を上下し山腹を右廻左廻して進 杓子岳と旭岳の間には北アルプス うである。山頂に違した。下をの りになつた。時に御年十六才であ 所であつた。周囲は山に囲まれ、 馬大池への道を急いだ。ガレた岩 右手の剣匠には望がかかり頂上が さかりを振り降ろしたかの様な断 そくと恐ろしい。頭上めがけてま一分であつた。やがて朝金をすませ ろうとして近づくと際いて逃避し をしている。小川先生が写真をと「テントから体を出すと思わず「寒 つた。然し父の後白河上中は院収 睛らしい。「荷物が無ければな 見えかくれする。休止した後、 に大きく(幕営の為) 随行過ぎる た。青々とした空にすいこまれそ む。左右が岸になって下に間傍が 馬。下の製剤から製が使いてくる

ある。旭岳を左に巻いて裏手へ廻

一気に黒部の相田谷へ降りるので

り小さい山を幾つも迂廻しながら

て六時出発。二四キロのコースを

問題がりの中に所々に起き出した い」と音をすくめる。明けきらぬ

は手にしみる様に冷めたかつた。 を知らぬ花が咲いていた。二時頃 ントへ降りていつた。米をとぐ水 時間半だから速いものである。テー が群生し、お山えんどうその他名

白馬 旭 合 第5日 7月30日

出第6

祖思谷5·20

た道をぐるぐるゆくだけである。

柳子で崖を陥りたりして多少スリ

ルがあつたが後は木々の間の平坦

宛 [1] 松の光、正

温が一条実現香峰寺の 生い舞る一つの御 町柳町に松の木の 間にいるば平野八

等院の戦で取れてお逃れになる途 との乱により平氏に勝ち以後がり 生れになった第一皇子である。 腹治二年六月に三条東洞院第でお 天皇と問皇太后滕原懿子との間に 皇子の弟には旗頭政と組んで平 天皇の御名は守仁といい後白河 上手な平滑盛に押えられていた。 物語に名文を以て語されている。

の位を譲り受け同十二月大極限で 即日星太子となつて保元三年天皇 代天皇となられた高倉天皇とがあ との間に宏徳天皇をあらけ第八十 た以仁王。その弟に後、建和門院 即位なされ第七十八代天皇とおな 二条天皇は久寿二年親王となり

との仲はうまく折合わなかつた。 天皇御在位の間は政治に関して

を登つてゆく。お花畑に咲く花は

望むと大雪溪が横たわり窓が流れ

ている。岩と草花の混つたお花畑

恰かも平滑元年十二月保元の乱 う名の寺が立つていたらしい。

を襲つて火を放ち宮を廃いて上皇 優れているだけで戦後は政治的に 第一の触功者源鏡期は武将として を一本御智所に置き天皇を黒戸の 類と結正し兵をひきいて夜三条殿 これを不満とした義朝は、藤原信 御所に移した。その間の事は平治

さで一条院にて崩御せられた。そ して御火葬し容確寺に蔵め奉つた 七年間で永万元年大月俄かに位を

して添除者という名は今昔物語に

栄えた。 天皇が位に即いておられたのは一體に近いが附近一帯は田で曖昧と

中流れ矢にあたつてお初れになつ

自分の第二皇子なる後の六条天皇際も尚所在が決らなかつたが、其 上皇には計られなかつたので上皇に五葉の松が植えられてある。現 に該られ同七月御年二十三才の岩の絳種々考定して遂に明治二十二 話は元に戻るが現在小松原にあ 千百六十七坪余である。

問題約二百三十八メートル<u>面積</u>一 御陂は南に面した小円墳で陵上

はこの御暖の附近にあつたものと 御火都坂があつて旧史が伝えていではなかろうか。歴史上にも特筆 あつて域は松原、或は夜笠山東麓・込まなければならなかつた天皇の 禄時代に一度検べた時に語の説が 天皇の御陵も所在不明となつて元 早くすたれてしまつて失く、二条 錯定せられる。 然し当の 否隆寺は けられている。そうすると不隆寺 る位置は管響流きという名前が付 認める所がない為に幕末の修復の 其の内の松原説が最も古吟寺の位 或は船岡山北麓といわれているが 年六月に今の地を御陵と定められ 修理を加えられたものである。 ろう。 るしい時代に育ち、巨つは治世な されるべき保元平治の乱の目まぐ る為にも一度めい福を祈ろうでは一を過ごした。 すにあたつて二条天皇の霊を慰め の和による気苦労は大変であつた 〇中は一通りで 燃しその戦乱の されておられなかつた方であつた ないか。(歴史部、川辺配) 運の人二条天皇 された天皇は歴 かな昔の事である。今この文を記 年若くしてこの世を去られた怨 世の無修な情景を (上特別には注目 ーそれから幾星

下る。のど来医した後、快進磐を一つと辿りついた水石場で一杯干命一左岸を歩いた。 た。道は急角度になり左は塔になっある紅飛きでゆき、そこから軌 流に落ち合つた。患をつく硫費の 荷物の傾くのが危なかつた。や一た。青々と溢む つでしまつた。値重に歩を進んだ一道に乗つて籐釣へ行とうというの 縣戦苦闘の来関門の百貫山にとり であつたろうか。川は潜る様に流 の色がみえた。
鄭所が高度あつて 難所と聞いたがやはり難所だつしている)。今日 タン(前田先生)と岩佐岩と僕は 止。皆相当に参つてきた。チベツ かかつた。最後の下りの前で休れ利原の石が含らきらとして目に に映つた。その夜は温泉でゆつく いる祖田谷の釣橋がくつきりと目 しばらく行くと確言の臭いも一層一にテントを張つた。食事の後では 谷間の川へ出た。下つて行くと本一かし相当早く進む。度々トンネル 道であり樹林の道であつた。休むる。蒙飛小屋で 様な顔をしていた。次は又ガレた一て、下の方に青々と川が流れてい の水を飲んだ。誰も彼も蘇生つた とんどん下つた。百億山の下りは 濃くなり、ついに両岸にかかつて の流れは碧々として岩を咬んでし 臭いにしめたとばかりに歩く。川 度に一行の顔にはありありと戦労 り体をやすめる事ができた。 第6日 7月31日 縮い。小川先生が手を振りながら 一根も何もなく山と山の間に空が見 は「岩が代」を歌つて散会した。 つて景色を見たりあつらえ向きで 倍した様なもので馬膨らしい。し 様な軌道に樂つた。動物間の光数 奇勝疑飛の所掛は切立ちせばまつ 保先生と順平さんには日馬で別れ えていた。暗くたつてキャンプフ 岩と岩との間の ある。鳣釣へ着くと河原に近く野 へ入つて涼しくなつたり鉄橋を渡 一足先に帰つて行かれる。(大久 アイアーをやり始めた。夜十時に 急流を見降ろして 体験の後、玩具の 狼猟まで三キロ。 の行程は黒部軌道 温泉へ入つた。屋

鐘釣 溫泉

る。再び重い荷を肩にして出発。 つた倍を歩かねばならないのであ ていたらしい。たから道標から思

祖

母谷→鐘釣

テントから湯い出したのは八時前。でも今日は移 寝坊して九時過ぎになつていた。 しないのでぐずぐ「を残されたことと思われる。

第7日 8月1日 縮に九日自転車で京都を出発し、 と思うコースであり楽しい極い出 度と行きません」とはその御脳和 おられたが、潮岬を廻つて三電県 各地の嵌会を縫つて快走を続けて 和歌山県側から海岸に沿つて南行 松坂に行かれる頃から例の九号台 しかし誰でも一度は行つてみたい 既に遭遇して悪戦苦闘。「もう」

この二条天皇の御陵がその一つ一の声がしんしんと響いて来た。 している所にも歴したから川へつかるのが非常に気 街では残々が何の

り遊んだりしていた。かんかん照 持よかつた。夕万近くなると利闘 ずと一日中、 何が光作つて食つた

生の繋がある。 気もなく見過ご

裂々の京都の

鐘釣→宇奈月888

部8:10 歸釣1·22丁字張月7·36-展

ながめ又自らもその一端をしよい一発。トロツコは相変らず満員。右 電機つかの政権が変転した。

はる

一月からは本物の電車。

九時に

北陸 う。尚その上に御父後日河上墨と一湖えられどこまでも青く澄んでい はたかつたであろした。猫又の発電所には調々と水が た。この頃から左手に川を男、山 手に川を見降ろしトンネルを辿つ 無事珍得。以後は雑談と思りに時 わせた。さしもの黒部川もゆつく 午前中にテントを片付けて一時出 り流れ下界の縁を深くした。字奈 本線大阪行の列車に乗り、座席も は低くなつて木が茂り保湿峡老恩

字奈月→京都 第9日 8月3日

六時五十六分、列庫は無事京都原

に着いたのであつた。

今回の山旅で特に気のついた路点 (後記)

を書いておとう。 2、登山に励れておくこと。 1、荷物は軽くすること。

そはもつとしつかりした基礎の上 契行しなければならない。 ※年こ 当然すぎるこれ等のことを完全に 5、水筒は個々に用意すること 4、常に足場に注意すること。 3、気力を失わぬこと。

プーレン先生はアラー神父様と一 紀伊半島を一周 プーレン先生自転車で

出来る様に念題している。 に、山岳部企員がどんどん山歩き